

## 旧約聖書を読んで感じること(27) 申命記(1)「父が子を背負うように」



約束の地を見るモーセ James Tissot

モーセは出エジプト後、神の心を心として、苦しい経験をしながら困難な道のりを経て、やっとヨルダン川の東に辿りつきました。川の向こうに約束の地、乳と蜜の流れる地を遥かに眺めるところまでやってきたのです。申命記は「重ねて申す」という意味とのことですが、実際、モーセはここで、諄々と、繰り返す、繰り返す、この旅の全てを語り伝えているのです。なぜなら神はモーセの願いに応えず、むごいとも思える「断念」を迫りました。モーセに残されたのは言葉だけでした。

「どうか、わたしにも渡って行かせ、ヨルダン川の向こうの良い土地、美しい山、またレバノン山を見せてください。」しかし主は、あなたたちのゆえにわたしに向かって憤り、祈りを聞こうとされなかった。主はわたしに言われた。「もうよい。この事を二度と口にしてはならない。ピスガの頂上に登り、東西南北を見渡すのだ。お前は、このヨルダン川を渡って行けないのだから、自分の目でよく見ておくがよい。」

(申 3:25-27)

モーセは神の言葉を受け入れて、愛するイスラエルに最後の諭しを、遺言として残しているのです。共に旅した民はもう世代交代を果たしてしまっていたので、荒野の旅を知らない者も多くいたのでしょう。

「また荒れ野でも、あなたたちがこの所に来るまでたどった旅の間中も、あなたの神、主は父が子を背負うように、あなたを背負ってくださったのを見た。」(申1:31)と言って、モーセはイエス様と同じように、神を父として、全幅の信頼と愛を抱き、民に神について次のように伝えています。

- (1) 偶像礼拝には焼き尽くす怒りをもって迫ってこられる**熱情の神**
- (2) 苦しみにあるときも見捨てられない**憐れみ深い神**
- (3) 出エジプトを果たすために様々なしるし、**奇跡を行われる神**
- (4) イスラエルが他のどの民よりも貧弱であったから**選んでくださった神**
- (5) 試練を通して神の声を聞くように**訓練される神**

いつ呼び求めても近くにおられ、イスラエルを「神の宝の民」とされる神を覚え、その戒めに従うように、繰り返して教えています。さらに、次のような、美しい言葉を民に言い聞かせました。この「イスラエルよ、聞け」とか「心を尽くし、魂を尽くし」という表現は申命記に何度も用いられているのです。

**聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。**

**あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。(申6:4-5)**



ピスガ(ネボ山)頂上

旅の最初に起こった「金の子牛」事件で、神がアロンも滅ぼせと怒られた時、モーセは必死でアロンをとりなして祈ったと、述懐しています。また、マナを食べさせたのは「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることを知らせるためであった」と、語っています。そして、興味深いのは異民族の土地を通過して行くための方法です。モーセの戦略は、まずイスラエルは強いという「噂」を広めることが第一歩。次に「友好使節」を送って、良い関係を築こうと申し出る。そして、静かに徒歩で進み、必要な物資は「料金を支払って買う」という穏やかな方法を伝える。それでも許可しない場合に、「降伏するように勧告」する。それでも応じない時、「町を包囲」し、戦いを宣言。町の廻りの食用にならない「木を伐採し、壘を築き」、戦闘開始となるということでした。その指揮を取るのには、なんと祭司の役目とのことです。また、陣営は常に清潔に保つのが鉄則でした。